



Vol.37

母のカイコ

『万葉集』には約四五〇〇首の歌があります。そのなかには、たくさん「生きもの」の名前が出てきます。一番多いのが鳥類で三十七種類の鳥の名前が歌に詠まれています。他に昆虫が十三種類、哺乳類も十七種



類みられます。そんな『万葉集』に詠まれた「生きもの」の歌について、今号から一年間ご紹介します。

「蚕起食桑」という言葉をご存知でしょうか。「蚕起きて桑を食む」とよみます。これは七十二候のひとつで、五月二十一日ごろ、蚕が桑の葉を盛んに食べて成長する時期をいうそうです。

右の歌には母親が養蚕する蚕の繭が出てきます。これは愛しい恋人に会うことができない鬱念とした気持ち、蚕が繭に籠る様子に喩えたものです。養蚕は古くから日本で行われており、「魏志倭人伝」にも記述がみられます。古代中国の養蚕は皇后が務める重要な職掌であり、日本でも女性が担っていました。そのため『万葉集』でも蚕を養うのは母であるのでしよう。

また『万葉集』における母は、娘を

たらちねの母が養ふ蚕の繭隠り
いぶせくもあるか妹に逢はずして

作者未詳 卷十二 二九九一番歌

〔訳〕足乳根の母がかう蚕の繭ごもりするように、心がこもってうつつうしいよ。妻に逢わずに。

監視する存在として詠まれます。例えば、卷十一の二三六四番歌「玉垂の小簾の隙に入り通ひ来ね たらちねの母が問はさば風と申さむ」(玉を垂らしたすだれのすき間から入って通つていらつしやい。足乳ねの母が音をとがめたら風と申しておきましよう)のように、女性の元へ通う男性はその母親の監視の目を掻い潜らねばなりません。「たらちね」の語義は不詳ですが、監視者である母に多用される形容であることが指摘されています。

この歌はそんな監視の目が厳しくて恋人に逢うことができなかつたのでしようか。「いぶせく」すなわち胸のなかが煙でいぶされたように、心がふさがれて晴れない心理状態にある、恋の辛さを詠んだ一首です。

(本文 万葉文化館 小倉久美子)

榎原市昆虫館



「見て、聞いて、触って感じる昆虫館！」をテーマに、昆虫に関する基本的なことから、自然のなかでの昆虫たちの生態や人とのかわりなどを楽しみながら学習できます。1000点を超える昆虫標本や化石標本、そして四季を通じて沖繩八重山地方の蝶が舞う放蝶温室は必見です。(要観覧料)



問 榎原市昆虫館
所 榎原市南山町624
☎ 0744-24-7246
休 月曜日(祝日の場合は翌日)
🌐 www.city.kashihara.nara.jp/insect/